

# 日本国際文化学会

<http://www.jsics.org>

## ニューズレター

2010年1月29日 発行

日本国際文化学会事務局

〒102-8160

東京都千代田区富士見 2-17-1

法政大学国際文化学部

熊田泰章研究室

2010年7月3日(土)、4日(日)の両日、第9回日本国際文化学会全国大会が東海大学札幌キャンパスで開催されます。公開シンポジウム、共通論題など、まだ確定していないものも多数がありますが、プログラム概略が一応できましたので、お知らせします。同時に自由論題発表者を募集します(3月末日締切)。詳細なプログラムは次号においてお知らせします。また、大会参加申込書は4月以降お送りします。

### 日本国際文化学会第9回全国大会 ご案内

#### 日本国際文化学会 2010年度 第9回全国大会 (東海大学国際文化学部・札幌キャンパス)

#### 自由論題発表者募集

- 1) 発表内容：個人研究発表とする(内容により、複数の発表者による発表も可とするが、その場合も1名分の時間とする)。
- 2) 発表時間：30分(質疑応答も含む)
- 3) 応募資格：日本国際文化学会の会員に限る。ただし、現在会員でない場合は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得ることとする。  
(入会の申し込みは学会事務局へ。入会手続きはインターネットでも可能<http://www.jsics.org>にアクセス)。
- 4) 応募要領：氏名・現職(大学教員・有職者の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記)・連絡先(住所、電話番号、電子メールアドレス)・発表題目・キーワード(3~5語)を冒頭に記し、発表要旨(40字×25行以下)を付けてワード文書とし、電子メールに添付して以下の大会実行委員会電子メールアドレス宛に送信すること(電子メールでの提出が不可能な場合のみ、郵送提出可とする。作成したワード文書のプリントアウトを大会実行委員会宛に郵送すること)。
- 5) 申込先：日本国際文化学会第9回全国大会実行委員会  
電子メール [kobayashi@tspirit.tokai-u.jp](mailto:kobayashi@tspirit.tokai-u.jp)  
(〒005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1  
東海大学国際文化学部小林公司研究室 電話 011-571-5111(代))
- 6) 応募申し込み期限：2010年3月31日必着

#### 第9回大会プログラム概要

《日程と共通論題・公開シンポジウムの子予定》

日 時：2010年7月3日(土)・4日(日)

場 所：東海大学札幌キャンパス

〒005-8601 札幌市南区南沢5-1-1

Tel 011-571-5111(代表)、Fax 011-571-7879

実行委員会事務局：

東海大学国際文化学部 小林公司研究室

Email [kobayashi@tspirit.tokai-u.jp](mailto:kobayashi@tspirit.tokai-u.jp)

参加費：一般会員2000円/学生会員1000円

## 第9回全国大会日程

### □大会前日（7月2日）

- 常任理事会・理事会 18:00～20:00

### □大会1日目（7月3日）

- 自由論題 9:00～11:00

- 共通論題 11:15～13:15

- 1 日中韓三国にみる文化の相違を超えた交流
- 2 多様な「共生」を解き明かす—その2：国際文化学をめざすもの
- 3 日本における反欧米思想の系譜

- 昼食 13:15～13:45

- 総会・講演 13:45～14:45

講演：松前紀男氏（東海大学副理事長・元学長）  
「国際文化学部の源流を見る」

- シンポジウム 15:00～17:30

〈地域から「国境」を考える—越境する文化—〉(仮題)  
地域から「国境」を眺めると、そこには中央から国境を考える視座とはまるで異なる原風景が見える。このシンポジウムは、それを以下の報

告と討論によって見据えるための試みである。

報告：(いずれも仮題)

「越境する自然」「越境する文化」「地域は国境を越えるか」「越境不可能な国家関係」

- 情報交換会 18:00～20:00

### □大会2日目（7月4日）

- 自由論題 9:00～11:00

- 共通論題 11:15～13:15

- 1 東海大学国際文化学部・現場主義への挑戦—座学からフィールドへ—
- 2 在日/日本人—その断絶と疎通、きしむ境界線 (いわゆる「日韓併合」100年の節目に)
- 3 アジアの学校教育における「周延的」教育活動の歴史的展開とその意義
- 4 リベラル・ナショナリズムと文化の再検討—グローバル化の視点から

- 昼食 13:15～13:45

- フォーラム 13:45～15:30

〈「国際文化学」教育の役割と課題〉(仮題)

## 日本国際文化学会 第8回全国大会 佐賀大学で開催！

日本国際文化学会第8回全国大会は、2009年7月4日（土）、7月5日（日）の2日間、佐賀大学本庄キャンパスで開催された。自由論題セッションには10部屋39名の発表者、共通論題セッションには9テーマ41名のパネリスト、司会者、コメントーターの発表があった。自由論題が例年並の発表者数であるのに対し、共通論題では例年のおよそ倍にあたる発表者数に恵まれたことになる。二つの公開シンポジウムは、4日のシンポジウムには4名のパネリスト、1名の司会者、1名のコメントーター、5日のシンポジウムには4名のパネリスト、1名の司会者で行なわれた。自由論題・共通論題の参加者は有料登録者数136名、ダブル公開シンポジウムは600名余り、情報交換会では、ギタリスト・西村正秀氏の演奏も行なわれ、90名余りの参加者があった。なお、本大会では、学会の初めての試みとして、託児サービスを実施し、総数4名の利用者があった点を付記しておく。

本大会を開催するにあたって、「九州・佐賀の特色を活かした大会になることを期待します」との熊田会長からの要請を受け、実行委員全員で、「佐賀大学が独自に提供できる企画は何だろうか」と議論を重ねた結果、「周縁」をテーマに掲げ、「A/B面の国際文化学—うらがえす知のたくらみ」という総表題のもとで、「ダブル公開シンポジウム」を実施することで話が纏まった。運営は、佐賀大学との

共催によって開催された。

4日（14:15～16:30）の公開シンポジウムは、表題を「磔の気骨—九州の闇を掘る」とし、「社会・ポリテクス」の視座に立脚したうえで、高度成長に翻弄された周縁としての九州の闇を、製鉄、炭鉱、水俣病、ハンセン病という四つの観点から論じていただいた。パネリストは順に、佐木隆三氏（作家）、荻野喜弘氏（九州産業大学）、板井八重子（熊本・くすのきクリニック院長）、久保井撰氏（九州合同事務所・弁護士）、コーディネーターは田村栄子氏（元佐賀大学）、司会は鬼嶋淳氏（佐賀大学）であった。その後、公開シンポジウムの一環として、ギタリスト西村正秀氏によるミニコンサート（表題：「こだまの夢—土と陰影の響き」）が、同じ会場で行なわれた。



5日(14:00～16:00)の公開シンポジウムは、表題を「土の記憶—陰影のなかの文化」とし、「文化・ポエティクス」に視座をおいてうえで、「自然と文明の際、(土/器)を枕に、文化の陰影・興行きに宿る死者の記憶・伝統に迫る」というテーマにそって発表が行なわれた。パネリストは順に、色鍋島十四代今泉今右衛門氏(陶芸家)、京極夏彦氏(小説家)、波平恵美子氏(元日本文化人類学会会長)、尾形希和子氏(沖縄県立芸術大学)、司会は相野毅氏(佐賀大学)であった。なお、今回のシンポジウムには、「開かれた学問(学際性)」と「男女共同参画」の促進という企図が念頭にあったため、パネリストは、研究者だけではなく、様々な職種から要請を求め、ジェンダー・バランスにも配慮しながら人選を行なった。



実行委員会の提案により、理事会では、例年行なわれているフォーラムをシンポジウムにより充当することが検討、承認された。主催校の都合により、大会の一つの目玉であるフォーラムを割愛するという処置に対し、快くご了解下さり、積極的にシンポジウムにご参加下さった学会員の皆様の心配りに、実行委員一同、頭が下がるおもいである。

本大会の共通論題は、ダブル公開シンポジウムの企図に準じて、「社会・4テーマ」と「文化・5テーマ」に区分され、前者が4日、後者が5日に行なわれた。4日(11:15～13:15)開催の4つの共通論題の表題は、1:「Globalization of Care—高齢社会日本における外国人介護労働者の受け入れ」、2:「戦後期のアジア太平洋地域:太平洋問題調査会(IPR)の活動とその時代を中心に」、3:「多様な『共生』を解き明かす:国際文化学のめざすもの」、4:「表象政治学(ラベリング・ポリティクス)の解剖学—マジョリティ/マイノリティ二元論の内破に向けて」であった。5日(11:15～13:15)に開催さ

れた5つの共通論題の表題は、5:「新自由主義と『伝統』の再構築」、6:「『学生三大期—野球の巻』にみる昭和初期のモダン文化」、7:「次世代に残すアジアの文化と技術」(3)、8:「人間をめぐる文化関係学—自然、動物、人間」、9:「世界遺産への視線②」であった。ここで各共通論題の内容について触れる余裕はないが、表題に目を通すだけでも、各々独創的なテーマを掲げながらも、その視点が、これまでの本学会の議論、動向を踏まえただけでも、それを発展させようとする内容を伺わせるに十分なものである。この点は大いに評価されてしかるべきではなかろうか。いずれの共通論題も多く参加者に恵まれ、白熱した論議が交わされたことは、そのなよりの証左である。

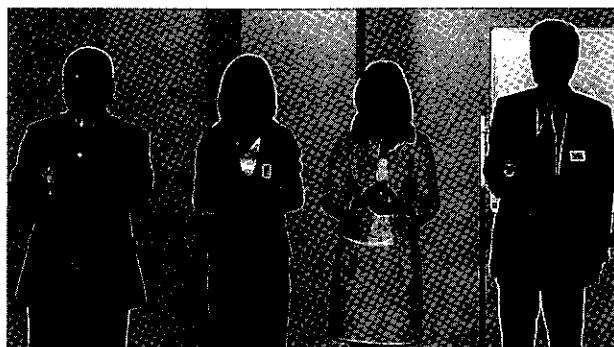
本大会の自由論題セッションは、「セッション選択の目安にして頂く」という理事会の指示により、各テーマ(表題)が記された点の一つの特徴があった(各セッションのテーマの設定は理事会での審議により決定)。第5回全国大会に倣い、各セッションにテーマを記すという今回の試みは、参加者側からみれば歓迎すべき計らいであったといえよう。ただ一方で、「テーマが個々の自由論題と必ずしも一致していないものが散見され、かえって混乱した」とのご指摘を受けた点も同時に記しておくべきだろう。この問題の背景には、日本国際文化学会がめざす異なる二つの方向性、多様性(学際性)と収斂(学としてのディシプリン)をどのようにうまく整合させていくのかという根本的問題が潜んでいるように思われ、容易な解決法はないのかもしれない。だが、私見では、これら二つの方向性は、いわば「国際文化学」という「テキスト」の横糸と縦糸に相当し、二つを巧みに織り合わせていく地道な作業のなかで、おのずから国際文化学としてのアイデンティティが確立されるように思えてならない。その点で、先述の共通論題のテーマ設定などは、大いに参考にすべきモデルを提供しているとはいえないか。いずれにしても、この問題は、学会の益々の発展を期待して、今後の重要な課題の一つとして取り組んでいただければと願うものである。

第8回大会の開催準備や運営にあたっては、本当に多くの方々からご助力を賜わった。熊田会長ならびに理事会、学会事務局の皆様、会員の皆様、佐賀大学の教職員と学生の皆様には、心から感謝申し上げます。

大会実行委員長 佐賀大学 木原 誠

## 第1回日本国際文化学会研究奨励賞、受賞者決定！ 第8回全国大会で栄えある授与式行われる

2008年度に制定された規程に従い、第1回研究奨励賞が以下の三名の会員（敬称略、氏名のアイウエオ順）に第8回大会総会で授与された。受賞対象はこれまでに学会誌『インターカルチュラル』に掲載された若手会員の論文と、会員の自薦他薦により別途推薦された論文であった。いずれも力作揃いであり、かつまた分野も多岐に渡ることから、選考は



学会賞受賞者と熊田会長（左端）

非常にデリケートなものとなった。受賞作以外にも優れた論文があったが、論文の完成度や発展可能性などの点で、受賞作には一日の長があったといえよう。残念ながら選に漏れた会員もこれに落胆することなく、今後とも研鑽に努めていただきたい。また、受賞会員にはこれをステップにさらなる研究の深化を期待したい。

### ・稲木 徹

論文名：「国際文化法」構想と国際文化学 『インターカルチュラル』第7号 92-104頁 2009年

### ・鳴原敦子

論文名：「貧困」と「持続可能な開発」に関する一考察『インターカルチュラル』第2号 103-130頁 2004年

### ・趙 貴花

論文名：グローバル化時代の少数民族教育の実態とその変容『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻 177-187頁（推薦論文） 2008年

選考委員 名古屋市立大学 寺田元一

## 国際文化学関連学部・学科第2回情報交換会、開催さる！ 17大学の参加で大成功！

2009年11月21日午後1時から6時半まで、国際文化学関連学部・学科第2回情報交換会が、次回全国大会の開催校である東海大学国際文化学部（札幌キャンパス）において開かれた。当学会が昨年からは提唱して全国の国際文化学関連の学部・学科に呼びかけ、昨年第1回が法政大学で開催されて本年第2回を迎えた。

本年参加は、東海大学、和洋女子大学、成蹊大学、山口県立大学、東洋英和女学院大学、フェリス女学院大学、中部大学、金沢大学、淑徳大学、城西国際大学、京都文教大学、龍谷大学、法政大学、文教大学、東北大学、佐賀大学、東京大学、計17校（昨年は10校）。

熊田泰章会長の挨拶のあと各校の発表と討議に入った。主な論点を以下に整理して紹介する。

1 高校生の意識と社会のニーズとの落差をどうするか  
質の高い生徒が「内向き志向」との指摘もあり。落差を埋める大学の役割をどう果たすか。

### 2 座学からフィールドへ

各校に共通する流れ。これをフィールドワークへと進化させていくのが大学の使命である。

### 3 大学院関連

学部との連携についての悩みあり。院生の研究の行き詰まりをどう打開するか。

### 4 教員組織の問題

教員の所属と提供サービスを分離できない悩み。たとえばコースは提供サービスなのだから教員は複数のコースに貢献すべき。サービスメニューの充実には教員の意識改革が前提となる。

### 5 英語での授業

留学生の受け入れ・国際化への対応に必須。各校とも課題のはず。継続的取り組みが必要。

### 6 推薦入学者増への対策

動機の変化、質の変化、学力対策、等。プラス志向により良い方向に転換する工夫が必要か。

### 7 FDの課題

テキスト・マニュアルづくりも必要か。苦勞しているとの発言あり。FDとは何かの議論も必要か。

### 8 アジア・アフリカというキーワード

一部学生に根強い人気。大国中心ではない「これからのグローバル化」の研究が必要か。

### 9 日本の大学のありかた

名称の変えすぎ。看板に手をつけられないドイツの大学も参考に。改革のありかたの議論必要。

10 国際文化コーディネータの創設に学会として取り組む  
国際文化学を社会的な形として定着させる方法として提案された。賛成意見多数あり。

文教大学 若林一平